

海でののはなし。

2006(平成18)年11月8日鑑賞(松竹試写室)



監督・脚本=大宮エリー/出演=宮崎あおい/西島秀俊(リトルモア配給/2006年日本映画/71分)

……新進クリエイターによる監督初作品に、何とあの宮崎あおいと西島秀俊
が出演！ 父親の浮気騒動をきっかけに生まれた2人の海辺での会話は、し
っかりした演技力のおかげもあり説得力十分……。『海でののはなし』のキー
ワードは「抱きしめてもらいたい気分」というものだが、さてその結末は
……？

大阪の新進クリエイターに注目！

「東京大学薬学部卒業」という肩書きで電通に入社し、CMプランナー、コピーライターとして大活躍していた女性が、1975年大阪生まれの大宮エリー。私はテレビのCMにはあまり関心がないから全然知らないが、彼女は数々のヒットCMを手掛け、国内外の賞を多数受賞している新進のクリエイターらしい……。そして映画の世界にも進出した彼女は、原作や脚本を担当した後、この『海でののはなし。』で映画監督デビューするとともに、2006年5月からはフリーとして活動中とのこと。

もっとも今日の試写室を世話してくれたRCSの佐藤英明氏の話によると、そんな華麗な経歴やイメージとは裏腹に大宮エリー氏は「天王寺生まれのオモロイ“おばちゃん”」とのこと……。これは是非彼女に注目し、機会があれば話をしてその才能に触れてみなければ……。

スピッツのCDから映画へ……

若者なら誰でも、B'zやスピッツを知っているだろうが、団塊世代でスピッツ

そのものを知っていたり、多少でもその曲を口ずさむことができるおじさんはほとんどいないのでは……？ しかし私は断固としてその一般的な団塊世代の例外で、スピッツの『遙か』はかなり一生懸命練習した曲。なぜ、こんなことをこの映画評論で書くのかというと、この映画は、2006年3月に2枚同時にリリースされたスピッツ初のコンプリート・シングル・コレクション「CYCLE HIT 1991-1997」&「CYCLE HIT 1997-2005」のTVCMを大宮エリーが手掛けたことをきっかけとして、スピッツの音楽から広がるイメージを彼女なりに映画として完成させたものだから。したがって、この映画の中で使われる音楽は全曲スピッツの曲ばかり。そして、私が一番よく知っている曲『遙か』は、まさに『海ではなし。』そのもののシーンのバック音楽として流されることに……。

宮崎あおいと西島秀俊の共演にビックリ！

NHKの朝ドラ『純情きらり』が9月末、久しぶりの大好評で終わったことは、宮崎あおいファンの私としては記憶に新しいところ。彼女は2006年には、『初恋』（06年）、『好きだ、』（05年）、『ただ君を愛してる』（06年）等にたて続けに出演し、無茶苦茶忙しいはずだったから、いつこの映画を撮影したのか全くわからないが、大宮エリーの監督デビュー作に登場したのが、『純情きらり』と『好きだ、』で共演したこの宮崎あおいと西島秀俊の最強コンビ……。

『海ではなし。』という映画自体が、Yahoo!にて期間限定でオンライン公開されたもので、それが大反響を呼んだため劇場用に音をリミックスして、ついにスクリーンに登場したもの。したがって、前宣伝も全くされていない映画だが、こんな作品に今をときめく宮崎あおいと西島秀俊のコンビが出演したのは、やはり、2人が大宮エリーの才能を認め、それにホレこんだせい……。

お父さんが浮気している……？

映画の冒頭が面白い。それは、高校生の娘、吹野楓（宮崎あおい）が、さかんにトイレのドアを叩きながら中にいる父親に向かって呼びかけているシーン。普通マンションにはトイレは1個しかないから朝のラッシュ時（？）に多少混むことがあるだろうが、こりゃあんまり若い娘がすることではない……？ そう思い

ながら観ていると、どうも楓は尿意・便意を我慢できなくてドアを叩いているのではなさそう……。 「あまり急かすなよ。一体何だ！」と仕方なく父親がドアを開けると、「お父さん、ケイタイ持ってる！」とのキツイお言葉。つまり、楓はトイレの中にケイタイを持ち込んだ父親が、「愛しているよ」と話し、「チュー」とキスする音をまちがいに聞いたというわけだ。そして、やっとトイレから出てきた父親に対して、「お父さん浮気してるでしょ？」と聞いた。しかし、そんな質問をしても「ああ、してるよ」という答えが返ってくるはずはないのだから、弁護士ならこんな場合尋問の工夫が必要。しかし素人の楓の場合、そんな直接的な質問になるのは仕方なし。もちろんその答えは、「お前、何をバカなことを言っているんだ！」と一笑に付されてしまったが、楓の耳にはたしかに父親がそう言っている声が聞こえたんだから……。

楓にとって博士（ひろし）の存在とは……？

思春期の娘が、そもそも父親に対する興味をどの程度持っているのか、また父親が浮気しているのではないかとの疑いを持った場合、それにどの程度の関心を示すのかは、私にはサッパリわからない。現に楓が友人の女の子に、「お父さんが浮気しているとしたらどう思う？」と聞いても、その反応はマチマチ……。しかし、楓が最も信頼している兄貴分のような日比野博士（西島秀俊）は、「そんなことないでしょう」と言うだけ……。

この博士は物理学を研究している学者だが、人との接触をできるだけ避けることによって、人を傷つけたり、自分が傷つくことを避けようという主義で生きているちょっと変わった男。つまり、「今日は先生の歓迎会ですから是非出席して下さいね」と誘われても、「出席できません」と回答するような男だ。ところが、楓にとってこの博士は、いつでも、何でも相談することができる少し年上の最も大切な人。そうかといって、恋人ではないし、もちろん兄貴でもないという不思議な存在。

こんな博士に対して、「絶対笑わない？」と約束させたうえで相談したのが、「お父さんが浮気してるんじゃないかと思うの……」ということ。これに対して博士がいきなり吹き出したから、楓が「信じられない！」と怒ったのはごもっと

も……。こんなやりとりの中、楓にとって博士の存在とは何か、そして父親の浮気というテーマを通してこれからどんな「海ではなし」が展開されていくのか、という興味がふつふつと……。

楓のショックの大きさは……？

楓が母親に対して、「お父さん、浮気しているのでは？」と問題提起したことに対する母親の対応も、この映画の1つの見モノ。父親と娘との距離感と母親と娘の距離感のはかり方は、さすが女流監督の感性……。そして、この映画の脚本も自ら書いた大宮エリーは、父親の浮気問題について面白い結論を用意した。すなわちそれは、父親の本家は別にあり、母親が浮気相手だったということ。すると、その娘は……？

今まで両親の愛を一身に受けて育てられてきた一人娘であることに何の疑問も持たなかった楓が、そんな事実を知った時のショックの大きさは……。ショックを受けた楓は家を飛び出して行ったが、そんな楓が悩みを打ち明けられる相手は博士しかいない。楓のケイタイの声に「非常事態性」を感じとった博士は、真夜中であるにもかかわらず、「海に行きたい」という楓の希望をしっかりと受け止めたが……。

「抱きしめてもらいたい気分」と言われたら……？

この映画では、そんなショックを受けた楓の気持を博士がどのように受け止め、それにどのように対応していくのかということが最大のポイント。そして2人の「海ではなし」は、『好きだ、』で2人が見せた静かだが集中力のある会話と同様に、静かだが説得力と充実感のあるもの……。そのきわめつけが、海辺と車の中でほとんど一夜を明かした楓が博士に対して、「今は抱きしめてもらいたい気分」と正直な思いを伝えるシーン。男たるもの、これに対してどう応えるべきか？ その答えは誰にでも明らかだと思えるのだが、博士はやはり……？

結末のつけ方は……？

大宮エリーの監督初作品は、71分という映画としては多少中途半端な時間なが

ら、シンプルなテーマについて淡々とした会話を通して、わかりやすく論点が整理され、それなりの結論に導かれていくように見える。その1つの結論が、「抱きしめてもらいたい」という楓の要請に対する「それはできない」「俺はお前を妹のようにしか思えない」という博士の答えだった。しかし、それはホントなのか？ それは、映画後半の博士の両親についてのもう1つの物語の行き着くところを観なければまだわからないもの……。

「俺は両親をバカにしているんだ」「俺って冷たい人間だろう」と楓に語りかけた博士だったが、果たして博士と両親の間で何があったのか、そして博士が両親に対して本当はどんな気持を抱いているのか、それを後半じっくりと味わってもらいたいものだ。その「試練」を経た博士は、再度あの海辺で楓と会った時、さてどんな行動をとるのだろうか……？

2006（平成18）年11月9日記

ミニコラム

女性監督、花盛り！

06年7月に公開された西川美和監督の『ゆるる』は大評判を呼び、第61回毎日映画コンクールでの日本映画大賞をはじめ、多くの賞を受賞した。

アメリカでは遂にヒラリー・クリントンが08年の大統領選挙への出馬を表明し、フランスでもロワイヤル氏が大統領候補に。またドイツでは既にメルケル氏が首相に就任している。このように政界における女性のトップ就任は世界の潮流だが、日本の政界はまだまだ男社会……？

しかし近時日本映画界では明らかにその潮目が変わり、西川美和の他、異才桃井かおりも『無花果の顔』（06年）で監督業に進出し、作家兼作詞家そし

て女優業もこなす才人阿木燿子も『TANKA 短歌』（06年）で監督業に挑戦した。さらに写真家の蜷川実花が『さくらん』（07年）を監督し、きらびやかな極彩色の世界をスクリーン上に展開した。そして大宮エリー監督の『海ではなし。』は、新進クリエイターとしての感性あふれる作品。これら女流監督に期待されるのは、「一発屋」で終わらないこと。北野武監督が「世界のたけし」となったように、世界に羽ばたく女流監督が出現し、日本女性ならではのすばらしい作品が生まれることを期待したい。

2007（平成19）年3月8日記